



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	家庭科における「学力」としての批判的思考力に関する研究(審査結果の要旨)
Author(s)	土屋,善和
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/145693
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

家庭科は、教科の歴史的背景から、「家事や裁縫」の技能習得を第一義とする教科というイメージが残存し、学校現場における指導に際し、実技教科としての側面のみが強調されがちである。しかし、家庭科における技能・技術とは、体験を通して生活事象を具体的に理解するための手段である。本研究は、21世紀型能力等として語られる今日の学力観を背景として、家庭科という教科の本質に立ち返り、技能教科という側面のみでは包含しきれないこの教科で育む「学力」とはどのようなものなのか、実証的に明らかにしようとしたものである。そこで着目されたのは、批判的思考力であった。家庭科教育における先行研究を論評した結果、問題解決学習の手段として批判的思考への論及はあるものの、そこで培われる批判的思考力と家庭科との関連及び家庭科によって育まれる批判的思考力の様相を具体的に明示した研究は見られなかった。本研究では、批判的思考の代表的研究者の一人である **Ennis, R. H.** の理論を参考としながら、家庭科における批判的思考力を定義するとともに、批判的思考過程と批判的思考力の様相を構造化し、家庭科で批判的思考を育むための授業モデルを提唱した。

以上のように、本研究は今日の新しい学力観の流れの中に家庭科を位置づけ、この教科の意義のとらえなおしを図り、教科指導に新たな意味を付与することができたという点で画期的であり、研究の意義と独自性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究ではまず、家庭科が学習者にとってどのような意味を持って受け止められてきたかを明らかにするために、高校生の家庭科観を調査した。その結果から、家庭科は技能教科としての側面が強調され、多様化・複雑化する生活事象に向き合い意思決定する思考・判断を促すための教科というとらえが希薄な現状が指摘された。こうした生徒の実態を踏まえ、今後志向すべき家庭科の「学力」の様相を明確にするため、文献をもとに学力論の変遷をたどり、今日目指すべき家庭科の「学力」について検討した。また、国内外の批判的思考研究を論評し、**Ennis, R. H.** の理論に依拠しつつ、批判的思考力を主要な家庭科の「学力」として位置付けるという理論仮説を提起した。そのうえで、家庭科教育によって育成される批判的思考力について授業実践とその分析から実証的に明らかにするという研究方法を用いている。以上の本研究における理論構築と授業実践による検証という手続きは、妥当で手堅い手法であると評価された。授業分析では談話分析の手法により、授業における生徒の変容過程を質的にとらえることに成功しており、具体的な生徒の学びの姿が見出され、妥当で適切な研究方法とみなされた。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

高校生に対する質問紙調査では、適切な方法で量的に十分な対象者を得て実施されており、分析も適切であった。文献調査も時系列に学力観の変遷をたどり、研究資料の収集も十分であり、適切な考察がなされていた。

授業実践研究では、3つの実践が取り上げられているが、第1の実践の分析結果から認めら

れた課題を改善すべく第2の実践が行われ、第2の実践では分析しきれなかった生徒同士の相互作用に見られる学習効果について分析・考察するために、さらに授業を改善して第3の実践に臨むというように、授業研究の目的を明確にして積み上げた研究手法によって、説得力のある結果を導くことができた。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、家庭科における「学力」として批判的思考力を位置づけ、その理論を構築するとともに、家庭科を通して批判的思考力を育むための授業の在り方を構想し、実践を通してその成果を検証し、家庭科における批判的思考力を育成するための授業モデルという形で一般化している。最後に提唱された授業モデルでは、「生活の意識化」「課題の明確化」「行動の試案」「行動の選択」という4段階を経て家庭科における批判的思考力が育まれるとし、授業過程に生徒同士および生徒と教師の相互作用を導入することによって、他者の意見に触発され自らを省察する契機となり、思考が深まることも実証できた。この結論としての授業モデルは、本研究のみならず、他の題材による家庭科の授業においても汎用可能であり、家庭科教育における授業研究の枠組みとしての有効性が認められた。

以上の本研究の考察は妥当なものであり、最終的に得られた結論は、批判的思考力をキー概念とした家庭科教育理論とみなされ、学術的に新たな一面を切り開いたものとして、その水準が十分であると認められた。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究の成果は、家庭科という教科の今日的な意義について、理論構築を踏まえ授業実践をもとに実証・提起したことであり、家庭科教育学研究の新たな可能性を示したものである。思考力・判断力、そして実践力が求められる今日の知識基盤社会における学力の育成に際し、家庭科教育が担うべきこととその成果を具体的に示した本研究は、今後の教育現場における授業実践に多くの示唆を与えうるものである。授業実践研究を通して、段階的に構成されていく批判的思考の学びの様相を明らかにした本研究の意義は大きい。審査委員会は、以上の本研究の成果を評価するとともに、論文全体の構成並びに引用が適切であることを確認し、本論文が博士（教育学）取得の水準に十分到達していると判断した。